
夏のわらし！

夏詠水面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏のわらし！

【Nコード】

N2288W

【作者名】

夏詠水面

【あらすじ】

日本の田舎町に立つ、喫茶店。

死
んだ父の後を継いでそのマスターとなった主人公は、どこか浮世
離れた少女と出会う。

―それは、遠い日の物語。

※ 某、ガンガン系漫画「夏の○らし」の二次創作では
ありません。

約束します。

※ 原則として、一日一回の更新を

9／4、完結しました。

第一章 夏の香りだ。そんな気がした。

「ふわあああっ」

店のカウンターに頬杖をついたまま、早川郁は盛大な欠伸をした。今日も、喫茶「シュガー」開店休業状態だ。天井に付いた年代物のプロペラは「ブーン」という不快な音を奏で続け、三つしかないテーブル席は、形も大きさも様々で、つぎはぎだらけのような違和感を与える。カウンターに使われている木は黒ずんでいて、かつての重厚さを僅かに想起させるものの、今ではコーヒーの染みにまみれ、永い眠りに付いた老人のように無機質だ。店内は薄暗く、慣れない人には、どこと無く犯罪臭が漂っているようにも感じられるだろう。

店員である郁のほかには、毎日のようにやってくる職人風の無口な男しかいない。彼は、開店時間と同時にやってきて、閉店時間と同時に帰っていく。その癖、スペシャルケーキセットだけで一日中粘るから、性質が悪い。郁はいつもタオルを頭に巻いている彼のことを、頭の中で《タオル男》とストレートに呼んでいた。

郁はやることも無く視線を彷徨わせる。特に何かを見るでもなく、視線の先はどこか遠くにあった。今は夏。父の死後、大学進学をあきらめて父の跡を継いだ郁は、病弱な母と共に喫茶店を経営している。

かれこれ、もう六ヶ月になるのか……

郁は、死んだ父のことを思い返し、寂しげに苦笑した。そこには、将来を棒に振らざるを得なかったことへの遣る瀬無さがあった。郁と同じ高校だった生徒達は皆、今も当たり前のように日常を歩んでいる。夢を目指している。自分だけが人生と言うゲームから脱落したのだ。

それだけでも十分不幸なのに、今度は郁の母親が疲労で倒れた。今は病院で療養中だ。

「負け犬、だよなあ」

郁は嘲笑した。もう一度欠伸をした郁は、気だるさと倦怠感を抱えたまま、休憩を兼ねて一度店の奥に下がろうとした。

カランコロン――

風が、吹いた。

夏の香りだ。そんな気がした。その香りに惹きつけられるようにして、扉のほうへ振り向く。

最初に目に入っただのは、ぼさぼさの髪だった。垢と泥で汚れた顔と、穴だらけの粗末な服、ほっそりとした手足。そして、靴を履いていない足は、砂利やアスファルトによって傷つき、血を流していた。それは、小さな女の子だった。

ホームレス。そんな言葉が脳裏に浮かび、しかし、即座に打ち消した。

ホームレスと言うには、あまりにも幼すぎる。見た目、小学生にも満たない。せいぜい幼稚園ぐらいだ。本来なら、どこに行くにもまだまだ保護者の付き添いが必要な年齢だろう。

けれど、その女の子は一人だった。

女の子は、郁の姿を確認すると躊躇いも無く近づいてくる。そして口を開いた。

「もか」

「……は？」

「もか」

女の子は言い直し、右手を差し出してくる。いっぱいひろげた小さな手の平で、三つの百円玉が輝いていた。

「もかって……ああ、モカね」

・モカコーヒー 三百円（税込）

「……はい。熱いから気をつけてよ」

カウンターの一番手前の席に座った女の子にコーヒーを差し出すと、両手で抱えてフーフーする。カウンターの丸椅子は大人用に作られているので、女の子がカウンターから頭を出すには、椅子の上に立っていないといけない。郁はじつと天井を睨んでいたが、しばらく経ってとうとう我慢ができなくなって、女の子に質問した。

「ねえ、きみ、なんて名前？」

フーフー。

「おとうさんとおかあさんは？」

フーフー。

「どこに住んでるの？」

フーフー。

「足、傷だらけだよ。痛くない？」

フーフー。

「……………」

こくん。

女の子は十分に冷ましたコーヒーを飲み始めた。しかし、すぐに唇を歪める。苦いのだ。

「……もし良かったら、ほら、そこに砂糖があるから、入れてみたら？」

そう提案してみたら、案外素直に砂糖の容器に手を伸ばす。ティースプーンで砂糖をすくって、まずは一杯。そしてもう一杯。さらにもう一杯。とどめの一杯。

「……………」

結局、カップが砂糖で埋まるまでその作業を続けた。もう、コーヒーに砂糖を入れたのか砂糖の山にコーヒーをかけたのかわからなくなっている。

「……甘いの、好きなんだ」

聞くと、こくんと頷く。

その後は静かな時間が流れ、プロペラの駆動音と女の子が時折コー

ヒーを飲む音がするだけが空気を揺らした。郁は、この空間だけが外の世界と切り離されているかのように感じた。

カランコロン――

しかし、やがて扉が開かれ、新しい客が店内に入ってくる。一日にこんなに客が来る日は珍しい。今度の客は、どこにでもいそうな若いカップルだった。彼らは、一番手前のテーブル席に着いた。

「いらっしやいませ」

伝票を持って注文をとりに行く。

「うわあ、なんだかレトロな感じのお店ですね。隠れた名店みたいな感じで素敵です」

カップルの、女性のほうが郁に話しかけてきた。

「うん。どこかのグルメ雑誌にひょつこりと名前を出していそうな感じた」

男性のほうも同意する。

「あ！ そうそう、そんな感じ。ねえ、やっぱり雑誌の取材とかあるんですか？」

「どうだろう？」

そんな話は、聞いたことが無いけど。

郁が返事に困っていると、その間に彼らは矢継ぎ早に質問してきた。

「なんだか喫茶店って儲かりそうですね。年収はいくらぐらいなんでしょうか？」

「内装って誰が設計したんですか？」

「若いようですけど、オーナーさんなんですか？」

「お客さんってどのくらい来るんですか？」

「見た目、結構老舗ですよ」

「随分値段が安いですけど、大丈夫ですか？」

「え？ いや、あ、その……」

しどろもどろになって答える。郁だってそこまでこの喫茶店のこと

を知っているわけではない。

カランコロン――

またも扉がベルを奏でる。

「こんなところに喫茶店なんてあったんだな」

「俺、毎日この前通ってるのにぜんぜん知らなかった」

「ばーか。そりゃお前が周りに関心を持ってないからいけねえんだろ」

今度は三人組の男子高校生だ。

「いらっしやいませ。少々お待ちください」

カランコロン――

「いやー、今日は暑いわねー」

「本当よー。私もう喉がカラカラだわ」

今度は中年女性が二人。

郁は目を丸くした。もう何日も喫茶店の店番をしているけれど、こんなに客が入ったのは初めてだ。慣れない事なので、手際よく注文をこなせない。そんなこなをしていて、しばらくしてふと女の子のいた席を見ると、もう、そこには誰もいなかった。

「つ、疲れた」

結局、一向に客が途切れずに閉店時間まで働き詰めだった。

郁が頼杖をついていると、店の奥からクククと笑い声がする。驚いて見ると、開店直後からいたタオル男が、まるで面白いものを見たかのように笑っている。

「いやあ、君。なかなか面白いものを見せてもらったよ」

「……ええ。この店に客が来ることなんてあったんですね」

郁も苦笑する。

「ああ、そういうことじゃない。そういうことじゃないんだよ君。君の目は節穴かい？ あの正体が本当に判らなかつたのかい？ あれは僕と間逆の性質を持つ存在だよ。その上気まぐれやだから性質が悪い。……いやあ、それにしてもたいした力だ。僕が何年もこの店に刷り込んできた負の力を、あっさり無効化して上回りやがった。あれで童を語るとは恐れ多い。あれはもう神のレベルだよ」

「？ ……あなた、一体何の話をしているんですか？」

男は笑ったまま立ち上がる。そして困惑している郁に、「お代、ここに置いてくよ」と声をかけて立ち去ろうとした。

「ち、ちょっと待ってください！」

郁は、とっさに声をかけてしまった。

「あなた、何者なんですか？ 父の生前の知り合いですか？」

男ははたと笑いを止めて、頭をがりがりと掻く。それから愉しそうにきゅっと唇を吊り上げて、

「僕かい？ 僕は……貧乏神さ」

男は、店を出て行った。

第二章 夏季限定トリプルパフェ／スペシャルケーキセット。

女の子が来た日から、十日が経った。そして、まるでそれが契機になったかのように客の数も増え続け、いつの間にか周囲から、「行列のできる喫茶店」という認識を得るようになってしまった。

女の子は、今でも三日ごとにやってくる。

三日ごとに、三百円。

頼むのは、いつもモカ。

砂糖たっぷり。

今更になって郁は漸く気がついたのだが、クリツとした女の子の瞳は、宝石のように美しい。女の子はあまり感情を顔に出さないようだったけれど、じっとその瞳を見つめていると、ほんの少しだけ女の子の内面がわかる気がする。

営業時間が終わった後。郁は、母の見舞いに出かけた。着替えの服などを持っていかなければいけないので、週に二回はこうして母の元を訪れている。病院に着くと、すれ違った看護婦に軽く会釈された。何度も来ているせいで顔を覚えられているようだ。病室に到着する。5109号室。郁は、ため息をついてから静かにドアを開いた。

「母さん、起きてる？」

声に反応して、部屋の中の人影が身じろぎした。

「……ああ、郁か。よくきたね」

返って来る優しい声。郁の一番好きな声だ。

「今、昔の夢を見ていたのよ。ほら、郁が芸大への推薦を取って、家族でパーティーをしたじゃない。一番はしゃいでいたのは父さんだったわよね。郁は昔から絵を描くのが好きだったけど、父さんは同じだけ昔から郁の絵を見るのが好きだったから」

「……うん、ああ、そうだったね」

郁が顔をしかめる。パーティーの四日後、父は事故で死んだのだ。だから、この話は、過去の幸せと今の憂鬱な日々との違いを、鮮明にしよう。

「郁、ごめんね。こんなことになって、本当に、ごめんね」

「母さんが謝る事じゃないって。仕方が無いことなんだよ。父さんが事故に逢うなんて、誰にも分からなかったんだし」

「でも、私は郁の母親だから」

その言葉に、郁ははっとした。そして、母のことを卑怯だと思った。親だからという言い訳で、いつも泥をかぶろうとする。郁は気まぐしくなって、母から目を逸らした。

「母さんが心配するようなことは何も無いよ。大学へは行けなかったけど、それなりに充実した日常を送っているし。最近、店に面白い客さんが来るようになったし」

「店って……ああ、喫茶店ね」

母は、ぼんやりと壁にかけられたカレンダーを見た。

「父さんが死んでから、もうどれくらいになるかしら？」

「もうすぐ半年」

「そう？ もっと経っていた様な気がしたんだけど……」

母は、柔らかな笑みを浮かべて、黙ったままカレンダーを見つめ続けた。そのまま時間が経過する。郁は引き上げ時かと立ち上がった。不意に母が質問する。

「郁は、まだ絵を描いているの？」

どきりとした。

内心で冷や汗をかきながら答える。

「うん。この前もコンクールに応募したよ。一次で落ちたけど」

「……………」

返事はなかった。

嘘だと判ったのかもしれない。

居心地が悪かった。

「……この病室もね」

唐突に話題が変わった。

「そろそろ個室にも飽きたわ。一人だと寂しいから。話をする相手もないし」

「……私がいるじゃない」

「そうね。でも、もう大丈夫よ。再来月位には大部屋に移れることになったから、話し相手の一人や二人、すぐに出来るわよ。母さんは世渡り上手だから」

何を言いたいのか分からなかった。けれど、とりあえず、「そうだね」と、相槌を打っておいた。

病院からの帰り道。ふと、郁の目に小さな家具屋が飛び込んできた。とっさに思い出すのは、低い椅子の上でよろよろと立ちながらコーヒーを飲む女の子の姿。

「……もうちょっと背の高い椅子でも、買っていこうかな」

幸い、ここ数日の繁盛のおかげで懐は暖かい。それに、なんとなくだが、あの少女が店に客を招き寄せてくれているように感じる。そのくらいのサービスは、しても良いだろう。

翌日。いつものように開店早々やってきたタオル男は、今までの倍以上の高さの椅子が、一つだけ設置されているのを見て、目を丸くした。

「君、随分あの童を気にかけてるねえ」

郁は内心では頬を引きつらせながら、営業用スマイルでさらりと無視する。あの、「貧乏神」発言の時から、郁は男に苦手意識を抱いている。男は、そんな郁を気にすることも無く、スペシャルケーキセットを注文すると定位置に落ち着いた。その日も、来客の多さに郁は忙殺された。

「モーニングコーヒーを一杯」

「ベジタブルサンド、Sサイズを一つお願い」

「店員さん！ 夏季限定トリプルパフェまだ来てないんだけど」

「あの、ミルクを持ってきていただけますか？」

「すみません、僕が頼んだのはアイスティーなんですけど……」

「し、少々お待ちください！」

忙しかった。客の注文をとり、持って行き、レジを打ち、空になったテーブルを片付ける。それからまた注文をとり、持って行き、レジを打ち：etc.

もともと慣れない作業だったせいで、一つ一つの動作がぎこちなく、郁は、しばしば客を怒らせた。もともと、大した店ではない。これといった売りがあるわけでもなく、コーヒー豆や水に拘りを持っているわけでもなかった。

けれど、まるで何かに惹き付けられるかのように客はやってくる。

郁としては、あまり忙しくないほうが好きなのだけれど、店としては喜ばしいことだ。

郁は、トリプルパフェを出すために、冷蔵庫を開けた。逃げ出したほどの多忙に、そっと溜め息をつく。そっと、女の子の為に用意した椅子を見る。今日はもう閉店間近なのに、まだ女の子は姿を見せない。

カランコロン――

夏の香りがした。

郁は弾かれる様に扉を見る。そこには、いつもどおりの女の子がいた。細い手足、垢まみれの顔、傷だらけの裸足……しかし、郁にはもう彼女の純粹できれいな瞳が見えていた。体の汚れなど、彼女の価値を何一つ下げるものではないことを知っていた。

「いらっしゃい」

意識しなくても頬が緩んでしまう。女の子は、まるでそれが当たり

前のように、新しく買ってきた背の高い椅子によじ登った。

「もか」

女の子が注文をする頃には、もうコーヒーの準備ができている。

「お勘定お願い！」

レジのほうから若い客が叫んだ。

「はい！ 今すぐ！」

郁は慌ててレジに向かう。客は郁の不慣れな接待に舌打ちした。その客が帰ってから、郁は彼女が夏季限定トリプルパフェを注文したまま、食わずに帰ったことに気がついた。件のパフェは、客に出されることも無くカウンターの奥に所在無げに置かれていた。

「あっちゃあ、やっちゃった……」

郁はぴしゃりと額を打って、ふと、コーヒーに山ほどの砂糖を入れている女の子に目を遣る。彼女が甘党だということは、思い出す必要も無いくらいに知っていた。

「ねえ、売れ残りのパフェがあるんだけど、食べてくれないかな？」

どうせこのままならこれ、捨てることになっちゃうんだけど」

女の子は、郁とパフェを交互に見つめると、随分長いこと考えてから無表情にくくんと頷いた。

決断するまでには随分長い時間をかけたけれど、食べ始めると一瞬だった。郁は、瞳をきらきら輝かせながら、パフェを掻き込んでいく女の子を、横目で見ながら仕事をした。女の子は、パフェを食べ終わると、恍惚とした表情のまま、上気した頬を両手で挟む。

「ご馳走さま」

タオル男が席を立つ。郁は、いつの間にか閉店時間を過ぎていることに気がついた。

「君、なかなかいい食べっぷりじゃないか」

男が、女の子の肩に手を回す。女の子は少しだけ身じろぎした。

「よっぽど甘いものが好きなんだねえ。それなら、朝早くに來るといいよ。此処のスペシャルケーキセットは死ぬほど美味いんだよ。ねえ、店員さん？」

鋭い目つきで睨まれて、夕は慌てて頷いた。

「えっと、今度来た時にでも、食べて見る？」

確認のつもりで質問だった。けれど、女の子は残念そうに首を振った。

「え？ どうして？」

少女の視線を追っていくと、壁にかけられている値段表にぶつかった。

・スペシャルケーキセット 千二百円（税込）

「ひょっとして、お金のこと？ いいよ、お得意様だからその位奢ってあげるよ」

そう提案してみたが、女の子は頑なに首を振る。お金のことはきちんとしていたいようだ。

「…ちえっ」

男が舌打ちして、代金を置いて帰っていく。

程なくして女の子も立ち上がった。代金はいつもどおりに前払いで受け取っているの、そのまま立ち去るかと思ったら、なぜか彼女は郁のほうにやってきた。そして無表情に郁を見上げる。そして次の瞬間、郁は目を疑った。フツと、蕾が綻ぶ様に柔らかな笑みを浮かべたのだ。それは、甘いものを食べたときに浮かべる笑顔よりもずっと、柔らかいものだった。

「ありがとう」

思わず見蕩れていると、少女はお礼を言って出て行った。けれど郁は、そのまましばらくぼうっと突っ立っていたのだった。

第三章 夏のわらし。

その三日後、女の子は、店に来なかった――
その三日後も、更にその三日後も、彼女の特別席は、ぽつねんと店の端に立ち尽くしていた。

「おっと！」

郁は、洗っていたグラスを取り落としそうになって、慌てて手で押さえた。溜息をつく。ここ数日はずっとこんな調子だ。店は繁盛している。けれど、それは嬉しいことでもなんでもなく、ただただ、苦痛だった。

……いや、

繁盛しているといっても、もう、行列が出来るようなことは無い。まるで、女の子の存在に客足が影響されているように、彼女が来なくなった日から徐々に徐々に客は減り続けている。この調子で減り続けたら、あと一月も経つ頃には元の閑古鳥に戻るだろう。それについては郁は気にしていない。ただ、身寄りのなさそうな女の子の行方が心配だった。どうして店に来なくなったのか、来れない事情があるのか。

郁は再び、深い深い溜息をついた。

「お待たせいたしました。こちら、ホットティーになります」

注文の品を持っていくと、客に怪訝な顔をされた。

「俺、アイスレモンティーを注文したんだけど」

「あ！ え！ あ、すいません！」

慌てたせいで、手元が狂った。ホットティーを客にぶちまけてしまった。

「熱かい！」

「うわ、あ！ 申し訳ありません」

「何やってんだよテメェ！ 火傷しちゃうじゃねえか！」

「申し訳ありません」

「うるせえ！ 土下座しろよ土下座」

「本当に申し訳ありません」

深々と頭を下げる。しかし、客の怒りは収まらなかった。騒ぎを知った周りの客も、眉をひそめてこちらを見る。郁は客に見られないように奥歯をぎりと噛んだ。周りの視線が痛い。中には、自分と同じ高校生のカップルの姿もある。今すぐ逃げ出したい気持ちに駆られた。

なんだか、疲れた。

客の怒鳴り声が遠くに聞こえる。

郁は、ぼうつとしたままそれに耳を傾ける。

その時――

「やめときなよ、青年。店員さんを怒ったって仕方がないでしょ？」
誰かが諫める。遅れて、タオル男の声だと気が付いた。

「ここでいくら怒鳴ったって、バイト君に何かが出来るわけが無いじゃん。それに、ここの店長は入院中だよ。怒鳴るだけ怒鳴り損じやないかな」

「あんたねえ！ 俺は火傷しかかったんですよ！」

「はいはい。それはさっき聞いたよ。どうしても腹の虫が収まんないんなら、今回の食事の代金はタダにするってことで手を打とう。君、よく食ってたもんね。サンドイッチ五切れにモンブラン二つ、ブラックコーヒーとアイスレモンティーがそれぞれ一杯ずつ。合計すりゃ三千円超えちゃうね。それを全部チャラに出来れば、大助かりでしょ」

「……汚れちゃった服をクリーニングに出したらそんなはした金すぐなくなっちまうだろ」

「あのね」

タオル男が、客の手を強く握る。客が顔をしかめた。

「君にそんな偉そうな事をいう資格があると思う？ 君、食い逃げ

する気だったでしょ。僕は貧乏な人は何人も見てきたからね。そういうのは一目でわかるんだよ」

「な！ あんた、何言ってるんだ！」

「そう？　じゃあ、確かめさせてもらおうかな」

そう言っただけでタオル男は、茶色い財布をピラピラさせる。客が慌ててポケットに手を伸ばした。

「な！　手前、すりやがったな！」

「気が付かなかったでしょう……っと、なんだ、小銭ばかりじゃん。えっと、十円二十円……ほらみろ、千五百円しか入ってない」

「！　っ！　返せ！」

客は、タオル男から財布をひったくると、郁をびしっと指差した。

「覚えてろよ！」

そして肩をゆすりながら店を出て行く。郁は状況に理解が追いつけずに呆然とした。

「随分疲れているみたいだねえ。そんなにあの童のことが気になるのかい？」

タオル男が心配そうに郁の体調を気遣う。そんなに頼りなく見えるのだろうか？

郁は、ふうと溜息をついた。

「助けてくださってありがとうございます。ご迷惑をおかけしました」

「そうだね。感謝してるんならさりげなく質問をごまかすのはやめようね」

タオル男はニヤニヤ笑う。郁は、タオル男に向き直った。こういう風にしつこく絡んでくる人には、ちゃんと答えを返さないといつまでも付きまとわれると経験で知っていた。

「あの女の子の事が気にならないといったら嘘になりますが、あの子が店に来なくなったからといって、とやかく言う筋合いは自分にはありませんから。もちろん、個人的にはあの子がこの店に来てくれなくなったことは悲しいですけど、それはあの子が決めることで

す。この店にもう来たくないと言うのならそれでもいい」

「でも、また逢いたいんじゃないの？」

「ええ。でもそれは、大して期待しないでおきましょう。世の中、諦めが肝心です」

タオル男は、黙ったままじっと郁を見つめる。

「……それで、君は失敗もしないうちから夢を諦めたんだね」

絵。

将来。

コンクール。

郁の目が、一瞬だけ宙を泳いだ。

「……何の、話ですか？」

「君の話でしょう。昔、君のお父さんがよく君の話をしていたよ。自慢された、と言うべきなのかもしれないね。確か、君は芸大への推薦を持っていたそうじゃないか。プロの画家になることが夢じゃなかったのかい？」

「昔の話です」

「違うよ。将来の話だよ」

「もう諦めたんです。いつ叶うかも分からない夢を追いかけるよりも先に、母のために入院代を稼がなくちゃいけませんから」

「ふうん。怖いんだ」

その、人を小馬鹿にしたような言い方に、郁は腹を立てた。

「違います！ 僕だってもっと絵を描いていたかった！ けど、夢じゃ食べていけないんだ！」

「でも、君は絵を描いていない」

「描けないんだ！ 仕方が無いだろ！」

タオル男が嘲笑する。

「まあまあ、落ち着いて。それは、本当に君のお母さんの願いなのかな？ 君のお母さんは、君に、『夢を諦めて私の入院費用を稼げ』とでも言ったのかな？」

「そんなこと……言うわけがないでしょう」

「そうでしょ。むしろ、逆のことを言ったんじゃないかな。自分はもう、一人でも大丈夫だから……って」

郁は目を見開いた。

病院での会話の意味が、漸く分かったのだ。

——そろそろ個室にも飽きたわ。一人だと寂しいから。話をする相手もないし。

——私がいるじゃない。

——そうね。でも、もう大丈夫よ。再来月位には大部屋に移れることになったから、話し相手の一人や二人、すぐに出来るわよ。母さんは世渡り上手だから。

「……凶星みたいだね」

顔に浮かんだ動揺を鋭く指摘された。

けれど、なんだか胸がすつとした。目が覚めた気がした。

「絵が、描きたいです」

「うん」

「もしかしたら、また挫折するかもしれません」

「そうだね」

「プロの画家になれるとは限りません。やっぱり怖いです」

「知ってる」

郁の言葉に、タオル男は淡々と答えていく。けれど、タオル男が求めている一言は、なかなか口にすることが出来なかった。そんな郁の気持ちを察したタオル男が、提案してきた。

「じゃあ、賭けをしようじゃないか」

「賭けですか？」

「あの童だよ。今日の閉店までにあの童がこの店に来たら、僕の勝ち。来なかったなら、君の勝ち」

「それで、何をかけるんですか？」

「僕が勝ったら君は絵を描く。君が勝ったら、君の好きにすればいい」

「それじゃあ、あなたの利益が無いじゃないですか」

「あるさ。僕は君のお父さんの代のときから、この店が好きだからね。君の背中を押してあげるぐらいなら、やってもいい。あの童のお株を奪うと言うのも一興だろう？」

タオル男が手を差し出す。郁は、ちよっただけ考えた。いや、考える振りをした。もう答えは決まっていた。

「分かりました。その賭け、乗りましょう」

郁は、その右手を取った。

賭ける。とは言ったものの、分の悪い賭けであったことには違いがない。現在時刻は既に十二時を回って、閉店時刻まで四時間を切っている。その間に女の子が来なければ、賭けには、負ける。タオル男には黙っているけれども、郁は、賭けに負けたら筆を折ろうと決めている。腹をくくった、と言うわけではない。ただ、あの女の子なら必ず期待にこたえてくれるような予感がしていた。それは自分勝手な予感ではあるけれど、確かな信頼感があった。

カランコロン――

初老の紳士がやってくる。

現在時刻、十二時半。

カランコロン――

若い親子連れがやってくる。

現在時刻、二時四十五分。

カランコロン――

OLの二人組みがやってくる。

現在時刻、三時十五分。

カランコロン――

カメラを携えた高校生のカップルがやってくる。

現在時刻、三時四十分。

じりじりと時間が減っていく。あと二十分しかない。あの女の子の来る時間は、日によってばらばらだった。朝早くに来ることもあれば、それこそ閉店間際に飛び込んでくることもある。来店時間にはこれと言ったこだわりがないようだった。

でも、今日ぐらいは早く来てもいいじゃないか。

郁は、いつも以上に女の子のことを待ち遠しく思った。客からの注文を効率よくこなしながら、どれだけあの少女が自分の心を癒してくれていたのか、深く理解した。郁は時計を見る。現在時刻、三時五十七分。タオル男のほうを見ると、彼も落ち着き無く足をゆすっている。不安が影をよぎった。

郁は、もう諦めて店を閉めようと立ち上がった。

その時、だった。

カランコロン――

風が、吹いた。

夏の香りだ。そんな気がした。

郁は、慌てて振り返ろうとする。足がもつれた。それでも構わず扉のほうを見た。

そこに立っていたのは――

エピローグ 二ヵ月後。

着替えをもって、母に会いに行った。しかし、病室はもぬけのからだった。人が暮らしていたとは思えないほど、綺麗に片付けられている。

「……………」

目の前の光景が理解出来なくて、思わず、郁はカンバスを手にしたまま呆然と立ちすくんでしまった。

そこへ、いつぞやの看護婦がやってくる。目が合った。

「母がどこだか知りませんか？」

「希望通り大部屋へ移しましたよ。5029号室です」
大部屋？

ああ、そういえば、そんなことも言っていたような記憶がある。

言われた病室に移動する。母は、同室の人たちと朗らかに会話していた。

「ああ、郁。いらっしやい。あら、何を持っているの？」

母の視線が郁の手元に注がれる。郁は苦笑しながらも持っていたカンバスを母に見せた。

描かれているのは、裸足の少女。顔は煤けていて、服はぼろぼろの布切れ同然。ごたごたしたビル街の真ん中で、無気力に佇んでいる。しかし、その目は生き生きとしていた。不幸など微塵も感じたことが無いような眼差しで、絵を見るものをまっすぐに見つめ返している。

「…いい、……絵じゃない。なんだか暖かい気持ちにさせられるわ」
母が簡単な溜息を漏らす。

「うん。この前コンクールで優勝したんだ。それは複製だけど」
「複製？」

「うん。基本的に、応募した作品は返ってこないから」

「ふうん」

母は何か呟き、それからまじまじと郁を見つめた。

「郁、何か良いことがあったの？」

「え？ …うん、あったと言え、あったかな」

少し話をしようと、郁は思った。

それは、とある喫茶店の店員と、不思議な女の子との物語。主人公の店員は、突然の事故で父を失います。病弱な母を助けるために夢を諦めたけれど、それは言い訳で、新しい世界に足を踏み入れることに臆病になっていただけでした。店員の母親は、暗に、「自分は一人でもやっていけるから、もう私の心配はせずに、自分の夢を追いかけてなさい」と、言いますが、その店員はその言葉が聞こえない振りをしていました。そんなある日、乞食の様にみすばらしい、しかしとても綺麗な瞳をした女の子が店にやってきます。その女の子に勇気をもたらった店員は、紆余曲折の末、もう一度夢を追いかけると誓ったのでした。

この物語のシメは、こうしようと思う。

それは、あの少女が店に顔を出さなかった理由。その微笑ましい種明かし。

十二日目にして漸くやってきた女の子は、千二百円のスペシャルケーキセットを注文したのでした――

エピローグ 二ヵ月後。(後書き)

更新が遅れて申し訳ありません。

急遽実家に帰らなくてはいけなくなり、バタバタしていました。

作品自体はずっと前に完成していたので、データも実家に持って帰ってあれば更新できたのだと、今更気が付いたり……

それはともかく、これにて「夏のわらし」――

完結です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2288w/>

夏のわらし！

2011年9月17日16時08分発行